
研究

ヴァーチャルな自己の存在 —探偵小説から見る情報社会—

The existence of virtual self

- Information society considered from a detective story -

キーワード：

ヴァルター・ベンヤミン, ピエール・レヴィ, 探偵小説, 痕跡, ヴァーチャル

keyword：

Walter Benjamin, Pierre Lévy, detective story, trace, virtual

名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程 大澤 健司

Nagoya University Kenji OSAWA

名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程 霜山 博也

Nagoya University Hiroya SHIMOYAMA

名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程 中村 啓介

Nagoya University Keisuke NAKAMURA

中京大学 井上 寛雄

Chukyo University Hiroo INOUE

名古屋大学大学院情報科学研究科 米山 優

Nagoya University Masaru YONEYAMA

要約

本研究は、サイバースペースをより魅惑的な場にするを目的とし、そのためのヴィジョンを提示したものである。現在においてサイバースペースの問題を論じるにあたり、ビッグデータの問題は避けて通れない。しかしながらこの論点は、主に技術的な観点からのみ扱われてしまっている。サイバース

ペースにおいて操作を行うのは、まさに我々なののである。そこでWalter Benjaminの議論を参照することにより、本論ではこの問題を我々の存在に引き付けて論じた。その際の一つの参照点として探偵小説の構造に着目し、それとサイバースペースを比較検討した。探偵が用いる痕跡の繋ぎ合わせの手法をノードの結合からなるリンク構造のアナロジーとして考察することにより、その類似を指摘しつつも、近代的な探偵的手法をそのままサイバースペースへと転用することの限界を示した。

そして、情報の哲学を打ち立てようとしているPierre Lévyの議論を参照することにより、この議論を現代的な問題へと接続した。ここにおいてビッグデータのあり方を踏まえた上での、サイバースペースにおけるヴァーチャルな自己の存在（我々の複製としての）が素描されることになる。この存在は探偵や群衆ではなく、Benjaminの議論における遊歩者がモチーフとなっている。サイバースペースをビッグデータから構成されるヴァーチャルな自己が遊歩する空間として捉え、これを我々の経験や創造性から論じている点が、サイバースペースの今後を考察する際に有用な立脚点となる。

Abstract

This study aims to make cyberspace a more fascinating place, and intends to present the vision for that. When we discuss a problem in cyberspace at present, we would not be able to avoid the problem of big data. However, such issue has been dealt with only from a technical point of view mainly. In fact, it is existence as us that operate objects in cyberspace. Therefore, by referring to the argument of Walter Benjamin, this problem is discussed in terms of human existence. Focusing on the structure of the detective story as one of the reference point, a detective story is compared with a cyberspace. Then, some points have been found as follows. : The similarity between the technique of the connecting of traces that a detective uses and the link structure built from combination of a node. The limit of diverting a modern detective method into cyberspace.

This is connected to a modern problem by referring to argument of Pierre Lévy who studies philosophy of information. Here, after considering the nature of big data, the existence of virtual self (as our reproduction) in cyberspace will be sketched. A promenade person (Flâneur) in argument of Benjamin is a motif of this existence. In this study, cyberspace is grasped as the promenade-space of virtual self who consists of big data, and it is discussed from our experience and creativity. When considering future of cyberspace, these points become a useful standpoint.

(受付：2015年5月15日，採択：2015年7月31日)

1 はじめに

本論の目的は、サイバースペースに対する一つのポジティブなヴィジョンを提案することである。それはサイバースペースをより魅惑的な場であり、情報社会における我々の創造性を十分に発揮できる場とするものである。そこで、現在の情報技術・情報社会を分析するにあたり、Walter Benjamin (1892-1940) の議論を中心に考察していきたい。Benjaminは「経験」を中心に情報を捉え、我々の存在から情報を語ろうとするからである。また、彼の著作(『複製技術時代における芸術作品』など)で論じられている写真に代表される機械的複製技術が出現してきた時期と同時期に、もう一つの特徴的な文化、つまり探偵小説が生まれてきていることにも注目したい。この探偵小説を一つのモチーフとして取り上げることにより、近代社会が陥った状況を提示し、現在の情報社会を照らし出す鏡とする。

では端的に、写真という機械的複製技術と探偵小説はどのような関係にあるのか。この関係には、時代という共通項以上のものが存在するのだ。例えばBenjaminは次のように述べる。

写真は史上初めて次のことを可能にした。それは、ある人間の痕跡を持続的に、そして明確に記録しておくということだ。人間の匿名性に対しての最も徹底した征服が確かなものになったその時に、探偵物語が生まれる。それ以来、人間の言行を捉えようとする努力は尽きることを知らない。(Benjamin, GS I 550)

写真において残されるものが人間の「痕跡(Spur)」であるならば、探偵小説において探偵が追い求めるものも犯人の痕跡なのである。

機械的複製技術がもたらしたものは、人間でさ

えも事物的に、つまり痕跡として無機的に捉える視点⁽¹⁾である。これは、全てを事物的な同一平面上で扱う新たな関係性を開示するということである。そしてその行き着く先は、人間と技術的対象という区別や、存在としての区分けが完全に構成されている状態からの脱却である。人間や自然の物象化を産む関係性と共に、探偵小説が生み出されてくる。探偵は痕跡から犯人を追い求めるのだ。

では、探偵が痕跡を追い求めるその先には何があるのか。それは痕跡を繋ぎ合わせ、一つの事件を解決するという結末である。ここで注目すべきは、痕跡の繋ぎ合わせという行為である。繋ぎ合わせるという機能にのみ着目するならば、それは現代社会におけるリンク構造と類似する。例えばWebやユビキタス・コンピューティングなども含んだ広い意味でのサイバースペースも、そこにあるものを繋ぎ合わせるということから成っている。それらは機械的複製技術が開示した関係性、すなわちイメージや文字、様々な機械や人間の痕跡を同一平面上で捉えるという関係性において可能となる。そして繋ぎ合わせるという行為は、新たな「布置 (Konfiguration)」を形成することであり、本論で主として論じることはできないが、最終的には我々の創造行為にも目を向ける大きな試みであるということも提示しておきたい。

本論では、まずは近代における探偵的推理の行き着く先を考察することにより、探偵的な痕跡の繋ぎ合わせの方法の限界をあらわにする。そこにおいて、情報の哲学の分野を開拓しているPierre Lévy (1956-) の議論を参照しつつ、Benjaminが描き出す遊歩者像からサイバースペースを捉えることにより、それに対する一つのヴィジョンが見出されることになるだろう。それはミクロなくヴァーチャルな自己から捉えられる、魅惑的なパッセージとしてのサイバースペースである。

2 探偵小説と情報社会

2.1 経験と情報

まずは、Benjamin的な視点から捉えられる情報概念について概観したい。それは近代を構成する要素の一部として捉えられており、現在の情報社会においても通じるものを持つ概念である。

Benjaminが述べる意味での情報は経験の伝達形式の変遷という軸で捉えられ、情報技術などの範囲にのみとどまる概念ではなくなっている⁽²⁾。Benjaminは「経験 (Erfahrung)」を、「物語 (Geschichte)」、「長篇小説 (Roman)」,そして「情報 (Information)」という形式の移り変わりの中で捉え、情報を我々がもはや何も経験することがないものとして位置づける。それは個人や集団の経験の内に何も浸透しないものであり、ショック体験に対する一つの反射的な反応しか引き起こさない。つまりここでは、情報という概念を広く、我々の経験全般を規定する形式のようなものとして用いているのだ。例えば物語とは、ある特定の物語を語る時に、語り手の経験がその物語に浸透していく。そして語り手の経験が浸透した物語を聞いた聴衆は、再度それを、今度は聴衆自身の経験を付け加えた上で（もちろん、これには意識的・無意識的という差は存在するだろうが）物語るのである。このような経験には、一つとして同じもの、つまりは複製可能な個的な経験というものは存在しない。それに対して情報の時代における経験は、経験の浸透を拒むものであり、まさに複製可能なのである。なお、情報という概念のこのような使い方については、モダンをアクチュアルに捉えた小説家であるPoeについて、Benjaminが次のように述べていることから理解できるだろう。

ポーのテキストは、野生と規律の間にある真の連関を理解させてくれる。彼の通行人は、自動装置に適応させられ、もはや自動的にしか自己

を表せないかのように振舞う。彼等の振舞いはショックにおける反応である。「誰かが彼等にぶつかる、彼等はぶつかってきた当の人に深々とお辞儀をした」。(Benjamin, GS I 632)

このように、Benjaminは人々の行動（もしくは経験）をある種の法則化へと導くような経験の形式を、情報として捉えているのである。

そしてPoeが描き出すものと同様の問題は、Benjaminが情報の現れの例としてよく取り上げている新聞にも妥当する。新聞は、それ以前の経験の形式が保持していた経験への浸透という効果を手放してしまう。

新聞は、膨大な発行部数で刊行される。いかなる読者も、他の誰かが<語って聞かされ>たいような事柄を簡単には手に入れることはできない。(Benjamin, GS I 611)

皆が同じ記事を読み、皆が同じ話題を語る。更にその記事は、誰の経験も浸透していない出来事そのもの⁽³⁾と言っても過言ではない。新聞のセンセーショナルな見出しは万人に伝わるが、それは同様の反応をいたるところで巻き起こすのみである。機械的複製技術が大量生産品を世に送り出したように、情報という形式は人間を大量生産品のようにする⁽⁴⁾。近代の原理が人間に作用する仕方が、情報という形式なのである。これを、至る所に同じものを産み出すという再現という概念で捉え、この関係が現代においても影響を与え続けていると認めることは可能だろう。

2.2 探偵小説と探偵

このような観点から捉えられる近代は、<情報的経験の時代>であるとも規定することができ。では、<情報的経験の時代>と探偵小説はどのような関係にあるのか。そして探偵、探偵小説

とはどのような存在なのか。その端緒をつかむために、探偵小説を分析している初期の著作である、Siegfried Kracauer (1889-1966) の『探偵小説の哲学』を参照したい。その冒頭では、探偵小説について次のように述べられている。

探偵小説の存在を証明する理念、探偵小説を創出する理念、それは限なく合理化され文明化された社会という理念である。この社会を探偵小説は徹底した次元性で把握し、美学的な屈折を駆使して体現する。文明と称されるこの現実社会のリアルな再現が問題なのではない。このリアリティの知性的な性格を際立たせること、それこそ探偵小説がもともと目指すところなのだ。(Kracauer, pp.1-2)

Kracauerのこの文章によって、探偵小説のあり方がほぼ語られてしまっているといっても過言ではない。つまり、近代の構成原理を際立たせたものが探偵小説であり、それが支配する世界こそが探偵小説なのである。近代の人格化である探偵が犯罪者や警察に優越して理路整然と謎を解決することによって、合理的なものが社会の構成原理であるということ、探偵小説は体現しているのだ⁽⁵⁾。その上で、探偵小説を生む基盤となった群衆の存在にまで注意を払う必要がある。人間の大量生産品であるような群衆との関係が、推理の対象となる痕跡を明確にしてくれるからである。

では端的に、群衆とはどのような存在か。Benjaminは群衆の存在の成立を、大量生産が可能となった、まさに近代に定める⁽⁶⁾。そして、19世紀の当時において群衆に注目していた人物が、探偵小説の生みの親でもあるPoeなのだ(Benjamin, GS I 624)。群衆が探偵小説の成立の基盤となる決定的な要素は、群衆のあり方に関係する。それは、情報という経験の形式や機械的複製技術などによって「服装と態度の画一性、とりわけ、表情の画一性」(Benjamin, GS I

631)を群衆が持つことによる。更にこの状況は、ある特定の社会階級や身分に顕著なものではなく、どの社会階級や身分においても一様に見られるものである(Benjamin, GS I 618)。このような状況において、探偵が追い求める痕跡、探偵が推理を行うための素材が問題となるのだ。

探偵物語の根源的な社会的内容は、大都市群衆の中で個人の痕跡(Spuren)が消し去られることである。(Benjamin, GS I 546)

個人の痕跡は画一的な群衆によってかき消され、証拠は他の品物の中に紛れ込む。大量生産品が巷にあふれ、群衆が街を闊歩するようになったからこそ、このような事態が生じてきたのだ。

ではここから、探偵小説のレントゲン写真⁽⁷⁾とBenjaminが指摘しているPoeの短篇小説『群衆の人』を例に、探偵の存在に迫りたい。この作品には探偵小説の骨格が明確に描かれているからだ。それは対象を事物的に扱う探偵である。

『群衆の人』における主な登場人物は次のとおりである。病み上がりの状態で謎の老人を追いかける男、ひたすら群衆を求めて彷徨い歩く奇妙な老人、そして群衆。カフェにいる男はじっと群衆を観察している。男は群衆の中から奇妙な老人を見出し、そのまま老人を追跡して共に街を彷徨うというのが『群衆の人』の大まかな筋である。

主人公の男は、探偵的役割の萌芽として捉えられる。男は『群衆の人』の冒頭にも描かれているように、群衆をその外的な要素から区分していく。カメラが人物を即物的な痕跡としてフィルムに定着させるように、男は道行く人々の描写可能で分析可能なもののみを拾い集める。つまり、外面に現れてくる振舞いや表情、もしくは身に着けている服装や装飾品といったものから、彼らが所属する身分や職業といったものを再構成し、浮かび上がらせていくのである。このように、探偵は内的な要素(群衆の意識など)といった分析不可能な

ものを捨象し、把握可能な事物的要素のみを対象とする。これは奇妙な老人を追う場面にこそ、如実に現れる。例えば次のような描写がある。

見失わないように、ここで私はピタリと彼の脇にくっつくように追い迫った。が、彼のほうでは一度として背後を振り返らないのだから、気をつくはずはむろんない。(Poe, p.620)

そしてとうとう、思い切って老人のまっ正面に立ちはだかると、じっと眼を据えて彼の顔を見入った。ところが、それでも彼は気がつかないらしい (Poe, p.624)

男がどれだけ老人に接近しても、決して老人から見返されることはない。老人は、あくまで男からの視線を気づかずに受け止めるだけである。この瞬間、老人は事物的な存在にまで落とし込まれており、単に事物として観察可能なものに変容している。むしろ内面を持たないかのごとく、男は老人を捉えるのである。つまり、人間でさえも事物化する〈情報的経験の時代〉の原理が、ここに体現されているのだ。またこれは同時に、探偵の推理の対象が何かも明示してくれる。それは事物であり、人間の即物的なものとしての痕跡である。

このような探偵小説は、近代の時代背景から産み出された結論付けることができる。情報という形式が法則化されたような同一の反応を人々に生じさせること、それはまさに群衆の誕生であり、探偵小説の芽生えである。すなわちこの背景にあるのは、機械的複製技術の開花、情報という経験の伝達形式の台頭、群衆の存在などといった構成要素を代表する近代なのである。

2.3 探偵的推理とその限界

ここからは、痕跡に基づいた探偵による推理について考察したい。後に検討するように、Lévyの「可能的なもの／リアルなもの」という軸にお

いて、探偵は推理するのである。そしてそれは、我々が用いる検索エンジンなどのシステムに類似することが理解されるだろう。これらの事柄を理解するために、まずはその近代的なモデルを見ていきたい。

そこで語弊を恐れずに、推理の基点となる痕跡とは何かを端的に示したい。それは人間でさえも無機的な存在として、そして事物的なものとして扱うことを可能にするものである。痕跡は他の事物と同様の平面に人間を立たせるものであり、つまり探偵は犯人そのものを追うのではなく、犯人が残した痕跡を追うのである。これは精神を持ち、何らかの有機的な意味連関を持つ人間としてではなく、事物という側面から人間を捉える視点にほかならない。ゆえに、探偵的推理に用いられる痕跡は、人間における本質的なものが消え去った廃墟であると言える。

ここで、Poeの『マリー・ロジェの謎』は一つの例を与えてくれる。この作品は、デュパンが現地で事件を調査するのではなく、主に各新聞の記事をもとに推理を進めていくという筋である。これはまさに新聞の記事として刻まれた痕跡を追跡するということであるが、Benjaminが情報の例として何度も取り上げている新聞によってそれが行われているということは注目に値する。この場合の新聞の記事とは事物化されたものの痕跡（すなわち、推理の対象となったマリー・ロジェの痕跡）であり、その痕跡は新聞の記事のように読むことができるものなのだ。そして彼女の痕跡は、実際の群衆の中で、そして新聞の記事という群衆の中で消えかかる。デュパンは各新聞を分析し、それぞれの痕跡を辿る。それはBenjaminによって次のように指摘される。

探偵物語の根源的な社会的内容は、大都市群衆の中で個人の痕跡が消し去られることである。ポーはこのモチーフを、彼の犯罪短篇小説のうちでは一番長い『マリー・ロジェの謎』にお

いて綿密に追求した。同時にこの短篇小説は、犯罪行為を暴く際にジャーナリスティックな情報を活用することの原型である。ポーの探偵、すなわち勲爵士デュパンはここで、自分の目で確かめることを基礎とするというよりはむしろ、日刊新聞の報道に基づいて活動する。報道の批判的分析が、物語の骨組みの役割を務めている。(Benjamin, GS I 546)

近代においては、全ては群衆と共に訪れる。それは人々という意味での、新聞の記事という意味での、機械的に大量生産された商品という意味での群衆である。そして痕跡は群衆によって運ばれ、浮かび上がり、群衆の中で消え去る。

探偵における痕跡の追跡は、確かに探偵小説のレントゲン写真である『群衆の人』においても描かれている。しかし、『マリー・ロジェの謎』には『群衆の人』にはない、ある決定的な要素が付け加わる。それは、痕跡の繋ぎ合わせである。『群衆の人』においては、一つの痕跡(奇妙な老人)を追い続けるのみであったが、『マリー・ロジェの謎』においては、各新聞の記事としてあるそれぞれの痕跡を繋ぎ合わせるプロセスが発生してくる。

痕跡は内面が消去されている(単純な意味での事物、すなわち純粋な群衆的存在)からこそ、それは置き換え可能であり、我々の対象として扱える素材になる⁽⁸⁾。そして、痕跡を頼りに探偵は推理する。更に、卑近なものや一見何の変哲もないものにまで興味をむけ、痕跡を読み取ろうとする。最終的に、数ある痕跡を吟味し、痕跡を繋ぎ合わせ、一つの推理を完成させる。このプロセスにより、探偵は過去に起きた事件を浮かび上がらせ、そして今ここに再現する(もちろん、事件をもう一度繰り返すという意味ではない)。

痕跡をふるいにかけて、それらの間の諸関係を検討し、その可能性を全て吟味し、探偵的手法のような、つまり合理的な知性によって事件を再び浮かび上がらせること。Charles Baudelaire

(1821-1867)によって、デュパンの推理は以下のように的確に表現されている。

その思考の極度な集中により、また自らの悟性の全現象を逐次分析することによって、彼は観念の発生ちくじの法則 (la loi de la génération des idées) を見破るに至った。ある一つの言葉と他の一つの言葉の間に、一見まったく無縁な二つの観念の間に、仲介をなす系列の全体を彼は再構成することができ、人の目を眩惑せぬばかりに、表明されておらずほとんど無意識な諸観念の欠落を補填してみせることができる。彼は可能態のすべてを、事実の蓋然的な連鎖のすべてを、深く研究したのだ。(Baudelaire, p.115)

ここで、先に引用したKracauerを再び登場させたい。つまり探偵という存在は、「隈なく合理化され文明化された社会という理念」の「知性的な性格を際立たせ」た存在なのである。そして痕跡の繋ぎ合わせの手法は、Kracauerが述べるところの合理的な(もしくは論理的な)推理である。確かに探偵は、その眼と知性によって事物化された断片的な痕跡を繋ぎ合わせることにより、群衆の中に消え去った事件を再び浮かび上がらせる。成功した推理は事件の最も確かな可能性を再現する。そこに断片的であった事件の全体像が浮かび上がり、隈なく説明されていく。このような探偵的推理は、探偵が合理的なものに支配されることによって完結するのだ。しかし、ここに疑問が浮かび上がる。全体が合理的なものによって隈なく支配されるという点において、事件の説明可能な意味は完全に回帰する。けれども、探偵による推理の結果として浮かび上がってきた事件の全体像は、過去に一度為なされていたものではないのか。

ここでまとめておきたい。探偵は痕跡を追い求め、繋ぎ合わせる者であった。探偵は今ここにいないがかつて存在した者の残した痕跡を扱い、その存在を再度、そのままの形で浮かび上がらせる

ことをその使命とする。これが、探偵的推理の解である。そしてまた、探偵は別の犯罪に対して解を求めていく。〈情報的経験の時代〉を再現という概念で捉えることが可能なら、探偵による推理も事件の再現という観点から特徴づけることができるのだ。

これに対して、19世紀に特有な存在である「遊歩者 (Flaneur)」が対置される。Benjaminによって遊歩者は、近代にありながらも近代を超え出る存在として描かれ、考察されている。確かに、遊歩者は探偵と非常に近い存在であるかもしれない。それは遊歩者を言い換えて「神官の尊厳と探偵の鋭敏な嗅覚を持ち合わせた、この目立たない歩行者 (Passant)」(Benjamin, GS III 196) と述べられていることから理解できるだろう。なぜなら、彼らは同じ時代背景から登場しているのだから。しかし探偵とは違い、遊歩者は合理的な法則性に沿って、事件の解決という一つの閉じた纏まりを形成しない⁽⁹⁾。むしろ、後に古本蒐集という遊歩者の行為の例で見ると、閉じたものを開こうとするのだ。このように探偵とは別なる視点から、遊歩者は事物や痕跡と対峙するのである。

遊歩者は探偵と同一の背景から産み出された存在であるが、探偵とは別の道を歩む存在である。遊歩者はあくまで合理的なものには従わず、群衆(つまりは近代的な社会そのもの)に対して抱く違和感を保持し続ける。そして、このような遊歩者の在り方こそが、情報社会における我々の新たな姿を描き出すだろう。これを踏まえ、情報社会の諸問題とそれに対する一つのヴィジョンを次に見ていきたい。

3 ある一つのヴィジョン

3.1 ヴァーチャルなものへ

ここから、サイバースペースにポジティブな特徴を見出そうと試みている哲学者の一人である

Pierre Lévyの議論を参照しながら、今まで述べてきた探偵小説的な構造がサイバースペースに及んでおり、まさに近代の延長線上に位置している側面があることを明らかにしていきたい。そのうえで、近代的な遊歩者像からサイバースペースを遊歩する現代的な遊歩者を描き出し、〈ヴァーチャルな自己〉を素描することによって、近代的な枠組みの乗り越えの可能性を示唆したい。

先に探偵的推理は検索エンジンのシステムに類似すると述べた。例えば検索エンジンにあるワードを入力することによって、先ほどまではディスプレイに表示されていなかった結果を出力させることができる。それは、サイバースペースに蓄積されていたものを様々なリンクをたどることにより、それをそのままの形で出現させるということである。また機械翻訳においても、訳文に求められるのは原文をできるだけ再現することである。このシステムの動作だけを見れば、この解は事件の再現としての解と同様である。探偵と同じく、まさに再現が問われているということである。「可能的なものにおいては、すでに全てが構成されているが、未発の状態にある。可能的なものは、その決定においてもその本性においても、何も変化することなく実現される」(Lévy, p.2) とあるように、この一種の再現という構造をLévyは「可能的なもの／リアルなもの」という対において的確に捉えている⁽¹⁰⁾。探偵がもたらす解とは、過去に行われた、現在から見れば可能性としての犯罪を再現させることであった。それは過去から現在へ犯罪を移行させたのであり、この意味では何も変化することなく現在に再現させるのである。このように、データ化、断片化されたサイバースペース上の痕跡を探る検索エンジンや機械翻訳の役割とは、サイバースペース上のシステムによる探偵的推理の代替といえる。

このようなシステムは非常に有益である。しかし、この軸から零れ落ちるものがあることも確かである。それはLévyによって「ヴァーチャルな

もの／アクチュアルなもの」の対によって示される。ここで用いられる「ヴァーチャル」という用語は、我々が一般的に用いる仮想的という意味合いとは異なるものである。「ヴァーチャルなものとは、問題提起的な複合体」(Lévy, p.3)であるとするLévyは、諸問題の今ここでの一時的な解決としてアクチュアルなものを捉え、それへの運動をアクチュアル化、すなわち「問題提起的な複合体によって要求された解決の発明」(Lévy, p.5)とする。この対は、先に考察した「可能的なもの／リアルなもの」の対とは異なるものである。

アクチュアル化は創造であり、力と目的性のダイナミックな布置をもとにしたある一つの形態の発明である。リアリティが可能的なものに備給されるのとは別の事柄が、すなわち、予め決定された総体からの選択とは別の事柄が、そこでは起こっている。(Lévy, p.4)

Lévyも述べるように (Lévy, p.4)、純粋に論理的なコンピュータプログラムの実行が可能／リアルという軸で扱えるならば、ソフトウェアの作成自体は、プログラマが諸問題(ヴァーチャルなもの)を独自の仕方では捉え、何らかの方法を発明し、その解決をソフトウェアという形でアクチュアル化するという運動なのだ。このプロセスは、何かを再現することとは異なる。諸問題を捉え解決に導くというプロセスにおいて、ヴァーチャルなもの(諸問題の複合体)とアクチュアルなもの(解決)は両極に置かれる。また同時に、ソフトウェアの実行によって、プログラマに対して再度新たな問題が提起されてくる。これは問題提起的な場への創意に富む遡行(ヴァーチャル化)であり、この二極の往還により、我々は何かを産み出していくのである。まさに創造のプロセスとして、これを捉えることができる。

このように、我々がヴァーチャルなものと共に

あるという事態を想定するならば、というよりはむしろ、我々がヴァーチャルなものと共にあるからこそ、サイバースペースもこの視点から捉えなおさなければならない。

3.2 ヴァーチャルなものとしてのサイバースペース

さて、サイバースペースは我々の痕跡が蓄積される場である。19世紀に代表される遊歩者が歩くパサージュが、様々な商品の流通や蓄積、群衆の移動、そして商店や様々な痕跡の集合として表現されるならば、現在のサイバースペースはどうであろうか。

サイバースペースというのはとりわけ行為が利用可能なデータとして登録され、変形される環境である。(Lévy, p.76)

Lévyが的確に述べるように、そこにアクセスする我々自身やその行為、もしくは様々なものがデータとして、つまりはその痕跡として断片的に集積され、流通する場がサイバースペースなのである。しかしよく指摘されているとおり、データとしての痕跡は、それを流通させ、集積させ複製しても、そのものは減少することがないという特性を持つ。現実的なパサージュにおいて、商品は購入されることにより店先から誰かの室内へと場を移す。しかしデータとしての痕跡は、それがいくら購入されようと失われることはない。

Benjaminが機械的複製技術を近代の構成要素の一つと捉え、その発現をパサージュに見出したように、複製技術のこの変転は現代の構成要素の一つとなる。つまりこの点を強調すれば、サイバースペースは現代的なパサージュであると捉えなおすことが可能である。なおBenjaminも『パサージュ論』で行っているように、これを建築的な側面から考察することも重要であろうが(例えば、Marcos Novakの「サイバースペースにおける流体的建築」などはその先験的な研究だろう)、本

論では問題提起の形にとどめておく。

そのうえで、Lévyはサイバースペースをヴァーチャルなコンピュータであると捉えている(Lévy, p.51)。詳しく検討することはできないが、ここではコンピュータを、我々とサイバースペースを介するインターフェースと読み替えたい。これにより、我々自身が問題提起的な場の一つの結節点となり、解を創造しながら絶えず新たな問題にさらされ、問題を独自の視点から捉えなおす運動の中に投げ込まれるようになる(もしくはなっている)ということを指摘したい。そしてその運動の場が、サイバースペース、つまりは現代的なパサージュであるという事なのだ。

我々の内には、すべての結果が未発の状態、選び取れる選択肢のような姿であるわけではない。サイバースペースの登場以前であれ以後であれ、我々は当然のことであるが、様々な問題を独自の仕方捉え、解決をすることの繰り返しにより生きていく。しかしそれは個人がそこに立つ、時空間というものに制限された状態であった。サイバースペースは、その制限を一時的ではあれ無効にする。つまり、我々をより広大なヴァーチャルな場に移行させる。このような形でサイバースペースを捉えなおす視点を、Lévyは提示するのである。

しかしこれは、「可能的なもの／リアルなもの」という、探偵的手法に相当するものが不必要であることを意味しない。しかし探偵的な手法によってのみ捉えられるサイバースペースは、Kracauerが考察したような近代的な社会の鏡像となる、という事なのだ。そうであるとはいえ、このような構造を持つサイバースペースは安定的な構造を見せることも確かである。それは、探偵小説における秩序に対比させられる。Kracauerは、問題から解き放たれた規則に従属させるだけの秩序は安定性を見せつける、と述べる。それは、「本当の、それゆえに問いをはらむ秩序にとって、到達しえない安定性である」(Kracauer,

p.85)。しかしながら、我々はまさに「問いをはらむ」場、つまりはヴァーチャル化とアクチュアル化をも含んだ場を生きているのであり、これからも生きていくのである。

さて、このように捉えられるサイバースペースに対して全く新たな代替物を構築することは現実的ではないだろう。そうではなく、サイバースペース上に蓄積される、断片化されたデータとしての痕跡の別様の用い方を探ることで、一つのヴィジョンを提示したい。そのモチーフとして、以下では遊歩者を例とする。近代においてその網の目を抜け出ようとした存在である遊歩者から、そしてLévyの議論からサイバースペースを捉えなおすことは、我々が遊歩者として現代的なパサージュであるサイバースペースを遊歩する可能性へと接続されるだろう。

4 サイバースペースを遊歩するという事

4.1 遊歩者のイメージ

昨今のサイバースペースを考察するにあたり、ビッグデータの問題を避けては通れないだろう。痕跡が集積される場がサイバースペースであると先に述べたが、ここではひとまず、痕跡の巨大な集積そのものをビッグデータと捉え論を進めていきたい。

ここでは、探偵とは別様の存在として登場した近代的な遊歩者に焦点を当てていく。そこから、何かの再現とは異なる遊歩者的な思考とその実践が「ヴァーチャル／アクチュアル」から捉えられることを例示し、現代的な遊歩者に与えられる、痕跡を残す遊歩者という像をサイバースペースとの関係から考察していきたい。

先にも言及したが、探偵的手法に関して言えば、サイバースペースにおいてある程度実現されていると見なすことは可能だろう。別の例で言えば、購入履歴から導き出される別の商品のおすすめは有用ではあるが、それは自分自身を探偵的推理の

対象とするようなもの⁽¹¹⁾である。またサイバースペースを別の側面から捉えるならば、「情報^{データ}は人を自由にするか」と題された西垣とドミニク・チェンの対談において、まさにビッグデータについて語られている。そこで繰り返される主張のひとつに、主観の側からシステムを作り替えていくという論点がある。しかし、我々自身は主体的にシステムを作り替えていくだけの存在なのであるか。つまりLévyの言葉を借りれば、我々は問題提起としてのヴァーチャルなものの布置に置かれることはないのか、という事である。主体的に作り替えていくだけでは通訳不可能な個的なシステムがサイバースペース上に産み出されるだけであり、それは結局のところ、私的関心に閉じこもっている近代の群衆的存在が産出されるだけに終わるのではないだろうか。

ここで、先にも述べたように遊歩者というあり方に注目したい。確かに近代的な遊歩者は観察する者であり、その意味では、主体的な意味付けをもって世界を構成し直していく存在である。しかし注意しなければならないのは、思考しながら歩く者(Benjamin, GS I 572)とも遊歩者が描き出されている点である。この側面を捉えるために、Benjaminの趣味でもあった古本の蒐集という事態を考えてみたい。鹿島も指摘するように(鹿島, pp.35-38)、古本蒐集の新たな対象が見いだされるときは、それらが持つ、本の内容ではない関係性によって促されるのだという(それは、我々が扱われている内容によって関連する書籍を買うこととは異なる)。ここでは初版本を集めているとしよう。ある初版本が献辞入りで、新たに蒐集した初版本も偶然献辞入りであった場合、献辞入りというそれらの本が持つ性質によって、献辞入りの本を蒐集するという蒐集の対象が新たに形成される可能性があるのだ。これは蒐集家からの働きかけのみでは開かれなかった可能性である。むしろ、我々によっては意味付けられていない(献辞という意味では我々の痕跡ではあるが)古本と

いう事物が持つ性質が織りなす布置の魅惑によって、新たな蒐集の対象が形成され、それに対する思考が産み出される。これと同様の事態を、遊歩者はパサージュで行っていたのだ。つまり遊歩者は、そのような思考を歩く事とともに実践していた存在として位置付けることができる⁽¹²⁾。換言すれば、流動的な群衆と商品の布置、その布置によって新たな都市風景を生じさせるパサージュが描き出す偶然的な連関によって、その都度別の目的を開き、思考を促されながら歩き続けること、それが遊歩者を遊歩者としていたのである。

遊歩的に思考することの重要性は、次のように述べられている。

それは世界史の風を帆に受けることである。彼において思考とは、すなわち帆を張ることである。帆をどのように張るか、それが重要である。(Benjamin, GS I 674)

ネットサーフィンという言葉から連想するわけではないが、我々を海に浮かぶ船と見立てた場合、「世界史の風」とは、それを受けなければ先へ進むことができない風である。書物という形式によって我々が知を受け継いでいるという単純な例でもって示せるように、我々は何らかの諸問題を、つまりはヴァーチャルなものを受け継いでいる。そのような風を受け、それに合わせてそれぞれの仕方で帆を張ることにより、我々は進んでいく(つまりアクチュアル化)のである。

それと同時に、我々が張った帆によって「世界史の風」自体に必ず影響を与えるという事態を決して見逃してはならない。つまり、我々の軌跡が痕跡を残すという事態である。しかしながら近代の遊歩者は、パサージュを遊歩した思考の痕跡を残せていない。つまり、帆に受けた風を囲い込んでいる状態である。では、現代的なパサージュを遊歩する者はどうであろうか。ここに、近代的遊歩者との質的相違が顕わになる。

4.2 痕跡活用のヴィジョンについて

ここで、再度痕跡の問題に戻りたい。Benjaminも思考を残すという事に注意を払う。思考の運動のみならずその停止も含めて思考を捉えなければならないと指摘し、その停止によって思考が結晶化する (Benjamin, GS I 702-703) と述べる。例えば次のような事態を想定してみたい。我々の思考は、ある形 (もしくは支持体) を伴って痕跡としてアクチュアル化される。その例が書物や論文、もしくは芸術作品などといったものである。そしてそれは、我々に種々の問題を提起する。ここでサイバースペースまで考慮に入れるならば、我々の思考はサイバースペース上に断片的にアクチュアル化されることになる。つまり、検索ワード履歴やアクセス履歴などが蓄積されること (ビッグデータとして) はその一側面である。

痕跡を思考という側面から捉えてみたい。我々がサイバースペースにアクセスするとき、そこに表示された何らかのテキストを読むことができる。それは何らかのアクチュアルな痕跡でもあり、サイバースペースという広大な問題提起的な場に組み込まれることによって提示された問題の断片でもある。このような痕跡によって思考が促され、我々の思考はヴァーチャル化とアクチュアル化の運動を往還していくことになる。つまり痕跡はアクチュアルなものでもありヴァーチャルなものでもあるのだ。これと同様に近代的遊歩者は、古本蒐集の例で見たように具体的な事物を対象にしながら、それと同時にヴァーチャルなものへの開きを見出していたのである。

先に見たように、探偵は痕跡をこの側面から捉えることをしなかった。つまり、「可能的なもの／リアルなもの」という側面からのみ、痕跡を捉えたのである。「ヴァーチャル／アクチュアル」を加えた二つの対から痕跡を捉えることが、一つの鍵である。

先に近代的な遊歩者は思考の痕跡を残すことをしなかったと述べたが、それには例外がある。つ

まり、Baudelaireのような人物の場合、パサージュを遊歩することによって商品や群衆からその時代の諸問題 (<情報的経験の時代>が提示する諸問題) を受け取り、詩作品という形でアクチュアル化することに成功しているのだ。しかし近代において彼のような存在は特例であろう。遊歩者の中でも、芸術家などといった者のみが思考の痕跡を残せたのである。では、現代の遊歩者はどうか。

現代においてサイバースペースを遊歩するならば、そこにおいて誰もが思考や行為の痕跡を残すことができる。それは探偵的推理を検索エンジンのシステムが代替するように、痕跡を残すことをサイバースペースのシステムが代替してくれることによる。ここに近代的な遊歩者との質的な相違がある。つまり、痕跡を残す現代の遊歩者への転換である。そしてこのような観点にこそ、ネット検索やSNS参加のみがサイバースペース上の遊歩であるとするような遊歩者像との相違も見いだせる。

4.3 ヴァーチャルな自己の存在

サイバースペースを遊歩することによって残される痕跡から立ち現われてくるものを、ここではマイクロなくヴァーチャルな自己>と呼びたい。この自己の実践的な具体例として芸術作品を例に挙げ、この<ヴァーチャルな自己>の働きを描き出していきたい。

繰り返しになるが、近代的遊歩者から現代的遊歩者への質的転換は、痕跡を残すということにあった。サイバースペースへのアクセスによって残されるものがアクチュアルなもの、つまりは痕跡である。これはつまり、ある自己に由来する痕跡がサイバースペース上に残されるという事態を意味する。痕跡からそれを残した存在に向けてハイパーリンクを構築すれば、サイバースペース上にその存在のマイクロなくヴァーチャルな自己> (の痕跡) が産み出されることになる。それはま

さに、我々の現実的な、そして局所的な自己をより広大な問題提起の場へと拡大すること（ヴァーチャル化）⁽¹³⁾である。このように、ある自己の痕跡の集合からなる一つのまとまりが、〈ヴァーチャルな自己〉である（しかしこれは、我々に由来するサイバースペース上のすべての痕跡を集積するという、一つの現実的な課題を孕むことになるだろう）。ここに、現実的な自己に対し、痕跡からなる別なる自己が立ち現われるのである⁽¹⁴⁾。

例えば knowbotic research の IO_dencies Series サンパウロヴァージョン (1998)⁽¹⁵⁾ は、〈ヴァーチャルな自己〉という存在を、芸術の分野で描き出そうとする試みとして提示することができるだろう。この作品では、ある人物の記憶や経験が文字化された（痕跡となった）地図がサイバースペース上に描き出され、インターフェースを通して我々はその痕跡に触れ、そこから喚起された別の文字列に移行し、他者の記憶を再構成しながら読むことが可能であった。このような痕跡として表現される記憶や経験から、サンパウロという都市の主体的でマイクロな記憶を、その痕跡の誘われるままに経験することが可能となっている。この作品のように、我々はサイバースペース上に痕跡を残すことが、そしてその痕跡を遊歩することが実際可能となっているのだ。

ここでまとめておきたい。近代的な遊歩者は、機械的複製技術や情報という経験の伝達形式などを構成要素とするような近代社会に登場しつつも、それを体現する探偵という存在を超え出る者として捉えることが可能である。そしてサイバースペースを現代的なパサージュと捉えることで、サイバースペースを舞台とする現代的な遊歩者像を、Lévy の「ヴァーチャル／アクチュアル」の対を軸に構築してきた。これは、再現とは異なる創造のプロセスを含む。そしてこの過程のいずれにも、痕跡が重要な概念となっていた。さらに遊歩者の現代への移行は、ただ舞台をサイバースペースに移しただけではなく、そこには自身の痕

跡を残すという決定的な差が見られるのであった。そして痕跡によって形成され得るものとして、マイクロなくヴァーチャルな自己を〈描き出した〉。しかし忘れてはならないのは、遊歩者が、商品や様々な事物、そして我々の痕跡という物質的なものを対象にしながらも、そこからヴァーチャルなものを見出すという事である。そこで強調すべきは、遊歩者が主体的に意味付けを行うことによってそれが開かれるというよりは、古本蒐集を例に出したように、本が持つ物質的な性質によって、ヴァーチャルなものへの通路が開かれるという事である。これは現代的な遊歩者においてはどうかであろうか。

先にも述べたように、サイバースペースにおける検索や SNS への参加も、遊歩者の行為と捉えることはできる。しかしながら、それは遊歩者の主体的な行為によるものであり、古本蒐集で見出されたようなヴァーチャル化の契機を捉えきれていない。近代的な遊歩者は他なる事物、他者の痕跡によってヴァーチャルなものへと導かれる。しかし現代的な遊歩者は、サイバースペース上に構築されるマイクロなくヴァーチャルな自己によって、つまり自己自身の痕跡からヴァーチャルなものへと導かれる通路をも得るのだ。

このように立ち現われてくるマイクロなくヴァーチャルな自己を遊歩者的に探査することにより、自己の過去のアクチュアルな痕跡と今ここにある諸問題とを同じ布置に置くことになる。まさに自身の痕跡から、ヴァーチャルなものへと移行するのだ。それは自己の未だ発現することがなかった諸問題が現在の諸問題によって刷新され（ヴァーチャル化され）、この布置から新たなアクチュアルな解を創出するに至る可能性を持つ。knowbotic research の例ではマイクロなくヴァーチャルな自己を他者が遊歩したわけだが、そして近代的な遊歩者も自己とは別の商品や痕跡に魅かれたのだが、サイバースペースを介しての〈ヴァーチャルな自己〉は、自己の残した痕跡を自

身で遊歩する可能性を持つのだ⁽¹⁶⁾。それは現代的なパサージュの中の、マイクロなパサージュであるとも言える。

この事態は何を意味するのか。Benjaminは事物の廃物や断片に非常に関心を注いだ哲学者であった。それが目指すものは、歴史的に日の目を見ることがなかった影の存在から、積極的な部分を取り出すことである (Benjamin, GS V 573)。つまり本論で描き出したヴィジョンは、過去の埋もれた自己の思考の痕跡から、アクチュアルなものを構築していくという理念を持つのだ。この理念のサイバースペース上での発現こそが、〈ヴァーチャルな自己〉を介しての現代的な遊歩者像であり、サイバースペースに対する一つのポジティブなヴィジョンなのである。

5 おわりに

本論で考察し、そして描き出したものは現代的な遊歩者、ひいては自己の存在そのものを考察する立脚点である。遊歩者をモチーフに見ることによって、近代的な遊歩者からの質的移行過程を明らかにした。そして、サイバースペース上に形成されるマイクロな〈ヴァーチャルな自己〉という存在を考察することにより、自己の痕跡さえも遊歩する現代的な遊歩者像を描き出した。

knowbotic researchの作品では、マイクロな他者の〈ヴァーチャルな自己〉を遊歩することが可能であった。これは、自身の〈ヴァーチャルな自己〉は他者から読まれ、そして痕跡が他者の視点からリンク付けされ、複数の〈ヴァーチャルな自己〉の痕跡を経由しながら再構成されるという可能性を示してくれる。つまり、マイクロな〈ヴァーチャルな自己〉に他者が入り込み、いわば独自の視点で解釈・批評・翻訳する可能性を含むのである。これは、マイクロな〈ヴァーチャルな自己〉そのものの創造的な翻訳という問題を提起する。このような自己に他者の翻訳が入り込むことによ

り、もはやマイクロなくヴァーチャルな自己は閉じた自己ではいられなくなる。そして、ここまでの考察において〈ヴァーチャルな自己〉に対し、常々マイクロと限定していたように、これはマクロという次元を視野に入れてのことである。サイバースペース上に集合的な知性は構築可能か、という議論があるが、マクロなくヴァーチャルな自己は集合的知性の一つのモデルとなるのではないだろうか。つまり、マイクロなくヴァーチャルな自己のそれぞれが結節点となり、マクロなくヴァーチャルな自己を構成する。それは個人的な知が蓄積されているという意味だけの集合的知性ではなく、それによってより広大な場で、ヴァーチャル化とアクチュアル化の往還を行うという意味での集合的知性でもあるだろう。

このように次なる課題を描いたところで区切りとし、本論を一つのアクチュアルなものとして提示したい。

注

- (1) 絵画などに描かれる人物とは違い、写真上の人物にはアウラは残されていない。つまり、アウラに包まれていた事物をアウラなき事物へと変換することが、機械的複製技術の一つの機能なのである。そのようにしてもたらされた関係性は、機械的複製技術以前とは別の関係性を開示する。すなわち、アウラに満ち溢れている人間でさえもアウラなき事物として扱われるようになるのだ。なおアウラとは、Benjaminにおける対象の真正性に関わる概念（もしくはオリジナル性という概念）である。アウラは写真以前には認められるものであるが、それ以降、アウラの喪失という事態が発生したと考えられている。Benjaminの主著である『複製技術時代における芸術作品』など参照。

- (2) なお、この観点から情報を捉える試みにつ

いては、拙論「ベンヤミンと情報 一言語と経験を巡って一」(『中部哲学会年報』第46号)も参照されたい。

- (3) 純粹に出来事それ自体を伝達すること(情報がそれを行うように)(Benjamin, GS I 611)
- (4) ポーの描く人々は、あたかも反射的にしか自己を表現することができないかのように振舞う。ポーにおいてはただ人間だけが話題になっているということによって、彼等の行動はなおさら非人間的な印象を与える(Benjamin, GS I 556)。
- (5) 「この探偵=神は、神が見捨て、それゆえに本来的ではない世界における神である。彼は本質の欠如したものを支配し、担い手をもたない機能を監督する」(Kracauer, pp.59-60)。なお、ここでの合理とは、人間の本質的で分析不可能な精神といったものを消去し分析可能な事物として扱うことによって、論理的な法則に従わせるための時代の理念として考えられている。資本主義や機械的大量生産も、この理念の現れの一部であると言える。
- (6) 大衆が成立したのは、大量生産が成立したのと同じ時期である(Benjamin, GS I 668)。
- (7) ポーの有名な短篇小説『群集の人』は、探偵物語のレントゲン写真のようなものである。犯罪が描き出すところの探偵物語を包んでいる布地が、この短篇小説においては欠落している(Benjamin, GS I 550)。
- (8) 存在する者の領域は、存在物の混同を排除しているのだ。存在者の本質的性質が、この領域を構成しているからである。合理^{ラチオ}がみずからを解き放つとき、関係性の中で熟成する本質は見過ごされる。そして、緊張感を欠いた人物像が、固定化した個別特性から組み立てられる。かれらは、内面の多義的な現れであるような外面をもたない。かれらは、内面が一義的に消失している外面である。硬直した要素から組み立てられた構成物は、疑問の余地のない確実性にまで成長し、すべて残らず複製することができる(Kracauer, p.128)。
- (9) 例えば、『探偵小説の社会学』(内田, p.202)なども参照せよ。
- (10) なお、「可能的なもの／リアルなもの」についての詳述は、『ヴァーチャルとは何か?』を参照せよ。
- (11) 市民社会は個人を規律づける権力を内面化し、市民である個人そのもののうちにたえざる自己監視の状態を生みだしている。(中略)そこで個人は監視の視線を自らのうちに抱えこみ、「自覚心」を異様に鋭敏にして、自己をたえず主体化することを要求される。夏目漱石はこうした「探偵的自覚心」の虜になった主体のありようを「安心なし」、「落ちつくこと無し」といい、二十世紀の文明病(神経衰弱)ととらえたのである(内田, p.38)。
- (12) 『一方通行路』の「中国陶磁器・工芸品」参照。また、このような痕跡の持つ断片性そのものの連関によって思考が促される例として、『一方通行路』や『パサージュ論』という断片的な文章による書物を挙げることができる。
- (13) ヴァーチャル化は本質的にアイデンティティの変化、特定の解決から全般的な問題への移行、あるいは特別な限定された活動から、脱局所化され、脱同期化され、集合化された機能への移行として分析されるのである。それゆえ、身体^{ラチオ}のヴァーチャル化は脱受肉化ではなくむしろ再発明であり、転生〔最受肉化 réincarnation〕、多数化、座標変換、人間の異型発生なのである。(Lévy, pp.28-29)

- (14) しかしこれは、「著者の思考に戻る」ため (Lévy, p.44) ということを目的としない。そもそも『群集の人』にも描かれているように、痕跡からその人物に完全に回帰することは不可能なのである。「あの老人は一人であるに堪えられない。いわゆる群集の人なのだ。後を尾けてもなにになろう。彼自身についても、彼の行為についても、所詮知ることはできないのだ」(Poe, p.624)。
- (15) このヴァージョンは、「この都市に生きる建築家や哲学者など一〇人の人物に個人の記憶や体験をもとにした心理地理学としてのサンパウロを言語の写像として描いてもらうことで、ユーザーはこのインターフェイスを通じてミクロな断片の連鎖としてこの都市を体験するとともに、複数の人物の記憶へとリンクしている経路を徘徊することができた」(四方, pp.86-87) プロジェクトである。なお、IO_denciesについては <http://www.krcf.org/krcfhome/IODENS_SAOPAULO/IOdencies.htm> (Accessed 2015/07/07) 参照。
- (16) 過去に「ソウトライン」というソクラテスメソッドを応用した思考の整理の為のプログラム (コンピュータとの対話によって) があったが、それとの対比で言えば、本論で提示した理念は自己との対話とでも言えるだろう。

参考文献

- Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp Frankfurt am Main, 1972-1989.
- Walter Benjaminの著作からの引用は上記の全集からとした。また、訳出の際には既訳を参考とした。以下に引用した著作の題目、邦題、そして全集の巻数、ページ数を示す。
- なお、本文中におけるBenjaminからの引用は、GSの略号の後に全集の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で記す。
- Das Paris des Second Empire bei Baudelaire* 「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」(GS I, S. 511ff.)
- Über einige Motive bei Baudelaire* 「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」(GS I, S. 605ff.)
- Zentralpark* 「セントラルパーク」(GS I, S. 655ff.)
- Über den Begriff der Geschichte* 「歴史の概念について」(GS I, S. 691ff.)
- Die Wiederkehr des Flaneurs* 「遊歩者の回帰」(GS III, S. 194ff.)
- Einbahnstraße* 「一方通行路」(GS IV, S. 83ff.)
- Das Passagen-Werk* 「パサージュ論」(GS V)
- 内田隆三 (2001), 『探偵小説の社会学』, 岩波書店
- 鹿島茂 (1996), 『『パサージュ論』熟読玩味』, 青土社
- ジークフリート・クラカウアー (2005), 『探偵小説の哲学』, 福本義憲訳, 法政大学出版局
- 四方幸子 (2002), 「アウト・オブ・コントロール・スペース——変動するインフォ・ジオグラフィ」, 『10+1』(No.27 特集=建築的/アートの), INAX出版
- 西垣通×ドミニク・チェン (2014), 「情報は人を自由にするか」, 『現代思想』(2014年6月号 特集=ポスト・ビッグデータと統計学の時代), 青土社
- マーコス・ノヴァク (1994), 「サイバースペースにおける流体的建築」, 『サイバースペース』, NTTヒューマンインタフェース研究所+鈴木圭介+山田和子訳, NTT出版
- シャルル・ボードレール (1984), 「エドガー・アラン・ポー, その生涯と著作」, 『ボードレール

ル全集 II』, 阿部良雄訳, 筑摩書房
なお原文に関しては, Charles Baudelaire,
“Edgar Allan Poe : sa vie et ses ouvrages”,
edited by W.T. Bandy, University of Toronto
Press, 1973 を参照した。

エドガー・アラン・ポー (1970), 「群集の人」, 『ポ
オ全集 1』, 佐伯彰一・福永武彦・吉田健一 責
任編集, 東京創元社

ピエール・レヴィ (2006), 『ヴァーチャルとは
何か?』, 米山優監訳, 昭和堂